

朝待ちのゆめ

イチ

1、 宇克出立

午前二時、宇克<sup>うかく</sup>の都市は静まりかえる。狭い路地を二つの影が怪しく横切った。

屋根から屋根をとびうつり、彼らが目指すのはこの都市の中心、夢巫主<sup>ゆめみこ</sup>の宮殿だ。月光に輝いている大理石造りのその建物には、警備も無く、施錠も無い。それは、この宮殿を襲撃するなどおそろしいことは、誰の頭にも考え付きさえしなれないと思われたからだ。しかし、エリとザジ、この二人に限ってはそうではない。

神をも恐れぬこの不屈き者どもは、何を隠そう、宮殿に鎮座する夢見の巫主の誘拐<sup>もくろ</sup>を目論んでいたのである。

満月の明るい光を避けるように、二人は外壁の影になつてるところを選んですいすいとよじ登っていく。目標の眠る寢室の付近まであつという間にたどり着くと、

ザジは窓の棧<sup>さん</sup>にひらりと飛び乗り、そつと窓枠を押した。

……開いている。

ザジが後ろに控えていたエリに手で合図を送ると、二人は音もなく軽やかに夢巫主の寢室に侵入した。障害はほとんど無いも同然だった。

開け放した窓から月光が差し込むほかは、室内は真つ暗だった。その光が届かないところは濃い影にのまれていて、部屋の全貌はつかめない。しかし室内はがらんどうと言つてもいいくらいに家具が少なく、それに何の気配もしない。心配ない、ここも安全だ。

エリは暗やみの中でぼんやりと白が浮かび上がる贅沢な寝台へ歩み寄った。そしてふところに入った縄と刃物の重みを確かめながら、その掛物を慎重に剥いだ。

しかし、そこには誰もいない。

代わりに、部屋の奥のうす闇から、怯え切ったか細い声が出た。

「だ……誰だ？」

慌ててそちらに目をやると、長剣をこわごわ握んだ夢巫主その人が、寝巻のままこちらを見つめている。標的自体に手がかかるとは想定外だ。

十代前半の幼い風貌の夢巫主は、柔らかな短髪をくし

やくしやにしたまま、夜風に揺れる丈の長い寝巻をたくし上げて、せいっぱい格闘の準備をしているようだった。しかしその華奢な体躯と、軸のぶれた構えでは、どうも迫力に欠ける。手に持った武器も、単なる装飾品であって実戦では使えないものだろう。見開かれた金色の両瞳は、今にも泣きだしてしまいそうだ。

『『アヌの継ぎ桐』猥下、どうか落ち着いてください。私たちはあなたに危害を加える者ではございません。どうぞ、剣をお納めください』

素早く刃物を取り出したエリは、それを背後に隠し、柔和なほほえみをその顔に浮かべた。じりじりとその巫主との距離を詰めていく。

ザジはいつの間にか姿を消していた。とっさに身をひそめ、この暗い部屋のどこかで好機を狙っているのだろう。エリは目の前の夢巫主の気をひくことに専念した。

「何の用だ？ このような夜更けに……ぶ、無礼者」

「大変な失礼をお詫び申し上げます、猥下。しかし、事態は切迫し、事を急ぐのでございます。さあ、こちらへ」

「し、しかし……」

「ご安心ください。さあ」

なかなか首を縦に振らない夢巫主は、長剣を握りなお

して言った。

「お前の他にまだいるのだな？ そやつはどこだ？」

なんと！ 相方はすっかり闇に紛れ、侵入者は一人だと思いつまらせることができたと思ったのに……これこそが、巫主の巫主たる所以、夢見のお告げの力であろうか？

驚いてたじろぐエリは「そ、それは……」といったまま言葉が詰まらせてしまった。巫主はきよるきよると部屋の中に視線を巡らせている。

と、エリの後ろからあきれた声がかかった。

「もういいだろう、エリ。やらしたのはお前だからな」  
見ると身を隠していたザジが柱の影から姿を現していた。

\*

ようやく眠れると思ったところに、手際の悪い不審者に侵入され、夢巫主は全くうんざりしていた。最近は大ださえ寝付きが悪く睡眠不足だったのだ、面倒なことはいいいから、今はただ静かに休みたい。

それなのに、寝台の前に見知らぬ二人がだらだらと居座り、不機嫌そうにお互いの非を責めている。

「私たちは敵ではない、だ？　馬鹿め、手の内を見せびらかす奴がどこにいる」

柱の影から出てきた褐色の小柄な人間が吐き捨てるように言うのと、

「あんたこそ、標的をちゃんと確認したんですか。巫主さんは、ほら、こうしてしっかりと起きていたではないですか」

もう一方のジリスの巫人が声を潜めながらも言い返す。

褐色の方はゆったりとした異国の服装に身を包み、小柄ながらも強健な体格をしていて俊敏そうだ。意志のつよそうな眉をしかめ、どっかた寝台に腰を下ろして部屋の中をにらみつけている。

対して巫人の方——たしか、エリと呼ばれていた——は旧制の軍服を上半身にまとい、柔らかな毛におおわれたジリスの下半身には、たくさんのハーネスやポーチをくくっている。腕を不自然に背中に回し、四本指の中脚を所在なさげにもみ合わせ、後ろ脚をいらいらと踏みかえている。

「お前がそのデブの身体でどたどた部屋に入るから、巫

主さんも起きちまったんだろうが」

「そんなことありません、おれは静かに入りました。ね、アヌの継ぎ桐さま。別にうるさくは無かったでしょう？」

蚊帳かやの外だったところに唐突に話が振られ、夢巫主はこれ幸いと苦情を漏らした。

「どうでもいい。用事が済んだのなら、さっさとお引き取り願おうか。私はもう眠りたいのだ」

「狎下、用事はまだ済んでないんですよ。私らが来たのはあんたと腰おっ付けて話をするためなんです」

「はなし？　昼間に設けられている謁見の時間を知らないのか」

あんなところ、と小柄な方は唇を歪めて鼻を鳴らした。

「宇克の聖王狎下、おれたちは夢見の巫主さま全員にお会いしたいのです。でも、ただ行っただっておれたちのような者では相手になんかされません。そこで、あなたに口添えをお願いしたく参上したのです」

「もし協力しないってんなら……と、こういうものが出てくるわけですね。狎下、素直に従つといた方が身のためだぜ」

あくまでも慇懃いんげんな態度を崩さない六つ足の巫人の言葉を引き取って、異国のやくざ者は刃物を取り出し、銀の

月光に光らせた。  
逆らわない方が良いかもしれない。少なくとも、巫人の方は夢巫主をひどい目に合わせたりはしないだろう。

\*

イーロウ大陸の南東に位置する古都宇克うかくに新しい聖王が登位した。

大陸に点在する五つの聖王座の代替わりは二十年ぶりで、このような戦乱の時期に冠をいただいた幼年の聖王は、歴史上もつとも偉大と名高い「アヌの薄ら氷うすい」に肩を並べる逸材と期待された。

恐れ多くも聖王猊下の御所ごしょに侵入したザジは、目の前にちぢこまる聖王に少なからずも落胆した。明晰詳細なお告げを見ることができるといふ触れ込みの宇克づきの夢巫主は、多少は勘が鋭く賢いところはあるだろうが、しかし従順そうで弱い。ザジが温めてきた壮大な計画の不可を託すにはあまりにも頼りない。

しかし、経験豊富なほかの夢巫主たちは、あまりにも政治家然としてしまっている。彼らは自分の聖王座の価値をしっかりと認識し、その対価の相場についても熟知しているだろう。背に腹は代えられない。

相方のエリは夢巫主を丸め込もうとしているようだが、そんなふうにおべっかを使って他人を操るようなことは、ザジにはどうも我慢ならないことだった。

「夢巫主さまよう、民草たみくさの声を聴く気があるってんなら、さつさとこつちに来て仲良くおしゃべりしようや」

刃物を見せつけられた夢巫主はとたんに素直になり、黙って寝台わきの椅子にかけた。よしよし、いい子だ。

「八年前の宇克劫略ごうりやくによつて都市の動産は根こそぎ破壊か強奪に遭い、更にあんたの先代——『アヌの結び目』は行方不明になった。まったく、酷い光景だったよ。血を分けた宇克の危機を、他の夢巫主さま方はどう思っていたのか。あんたはその頃それこそ赤ん坊だったから知らないだろう、何をしてくれたと思うね？

何もしなかったんだよ。ただ、見て見ぬふりをしたんだ。

相手方の頭領が流行り病でオツ死んじまって、なんとか宇克はいのち拾いしたが、それでも奴らの薄情は許さ

れるもんじゃやない。

いいですか、宇克の夢巫主、聖王『アヌの継ぎ桐』殿下。私たちは別に奴らに復讐しようってんじゃないです。

あくまで平和的に、埋め合わせのご請願を申し込みたいんだ。宇克の被った損害の、ほんの一部分でいい。つましい、ほんの可愛いお願いだろ、な？」

となりに来たエリと一緒に、こんこんと巫主に聞かせていたザジの演説は、いよいよ佳境に入った。

「それでだ。さっきこのネズ公が言ったように、ちよいとあんたに手伝ってほしいんですよ。難しいことじゃない、ただその場にいるだけで良いんです。宇克の代表たるあんたが一枚かんでなきや筋が通らないからな」

「どうです？」

畳みかけるように問いを重ねるエリを一瞥し、まだほんの子供の夢巫主は、探るような嫌な目つきをした。

「こつちの者はともかく、お前の話なら聞く価値がありそうだ。確認したいことは一つ、私の身の安全は保障されるのか？ エリ、といったな、お前の口から答えが聞きたい」

なんて可愛げの無い！ ザジは憤慨し、声をはりあげ

た。

「まるつきり、完璧に、安全だ！」

「今、なんとおっしゃいました？」

「エリ、答えろ。私はお前たちを信頼しても良いのか？」

その問いには答えず、エリは「なんでおれの名を……」とつぶやいた。

「すまん、エリ。さつき口が滑っちまった。

アヌの継ぎ桐さま、こいつに代わって私が保証します、あんたには指一本触れさせない」

「エリ、この異人のチビは信頼できるのか？ さつきからお前を酷く軽んじているようだが」

「ええつと……生意気な奴でして……」

こりやだめだ。エリは目を白黒させて、夢巫主にすっかり混乱させられている。

「エリ、信頼できると言え。巫主さんは私らを仲たがいさせようとしてるんだぞ。昼には追手が都に到着する、ここで時間を食ってる場合じゃない」

「なに？ 追手？ お前たちには私のほかにも敵がいるのか？」

エリはようやく、どうにかしてはつきりとした言葉を絞り出した。

「おれたちは……あなたの敵、ではありません。安全です。信頼できます」

しかしすっかり焦ってしまったていて、そう言いながらも取り出した縄であつという間に夢巫主を縛り上げてしまった。カづくは最後の手段だつていうのに。

エリの突然の荒っぽい行動になすすべもない夢巫主は、かわいそうなくらいに驚いて目を見開くことしかできない。猿くつわをかまされエリの背に担がれ、いかにも誘拐されている格好へ大変身を遂げた夢巫主に、気を落ち着かせようとザジは声をかけた。

「ともかく、話はまとまりましたでしょうか？ 私はザジ、こいつはラティジエリ。そんであんたはアヌの継ぎ桐だ。これから楽しい大陸横断旅行ですよ。肩の力抜いて、仲良くいきましようや」

そして三人は、白む空に背を向けて、壁門をくぐり宇克を發った。